

特別支援学級でのタブレット端末持ち帰りによる家庭との連携の一考察

中山亜紀（熊本県高森町立高森東小学校）・山本朋弘（鹿児島大学教育学系）

概要：特別支援学級でタブレット端末を継続的に家庭に持ち帰り、児童に関する情報を家庭と共有しながら、学校と家庭との支援の一貫性を図るよう取り組んだ。その結果、学校と家庭との連携が深まり、保護者が教師の支援を参考にして家庭学習を支援し、積極的に家庭学習に取り組むようになり、学習内容の定着を図ることができた。

キーワード：特別支援学級，タブレット端末持ち帰り，家庭との連携，情報共有，支援の一貫性

1 はじめに

子どもの教育や支援において、学校と家庭との連携・協力は必要不可欠なものである。特別支援教育においては、早くから様々な取組が行われてきた。中央教育審議会答申(2009)では、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立ち関係機関が連携して、障害のある子ども一人一人のニーズに対応した支援を効果的に実施するために「個別的教育支援計画」の策定を示した。策定に当たっては、保護者の参画を促すなどして、子どもや保護者の意見を十分に聞いて、そのニーズを正確に把握することが大切となる。そのため、学校と家庭においては子どもの情報を正確に伝え合い、正しく理解し、ともに子どもの情報を共有化することが求められる。

情報共有の手段や方法としては、連絡帳や学級通信、懇談会や電話など様々で、それぞれが子どもに関する多くの情報を互いに発信している。しかし、言葉や文字を介しての情報だけでは、それぞれの立場に基づく子どもの捉え方を一方的に伝達することが多く、「なかなか分かってもらえない」「伝わらない」といった状況を生み出すことが少なくない。特別な支援を要する子どもにとって、環境によって支援の方法が異なることは、思考を混乱させてしまうこととなる。実際の子どもの情報を共有化することが、よりよい支援を生み出し、子どもの成長・発達につながると考える。

実際の子どもの情報を動画や静止画として伝達することは、子どもの実態を明らかにし、多くの情報を共有することができる。それは、子どもの姿だけではなく、子どもが置かれている状況や周囲の子どもたちの様子、教師の指導法など子どもを取り巻く学習環境が含まれた情報であり、特別支援教育にとって非常に有効な情報源であると考えられる。

そこで本研究では、学校と家庭とが連携して支援の一貫性を図ることを目的として、学校での子どもの様子を正確に伝達し、家庭からの情報を的確に収集するためのICT活用を取り入れた実践に取り組むこととした。

2 研究の方法

(1) 対象学級

特別支援学級在籍の小学校第1学年女児である。入学当初、平仮名や数字の読み方を指導することが必要であった。そのため、児童の特性に合わせた教材・教具の準備や声かけ等の工夫を行うこととした。保護者は、学校教育にとっても協力的で特別支援学級に対する関心も高い。

(2) 家庭との連携ツール

通常の手書きの連絡帳に加え、学校での学習の様子や作品及び生活の様子、教師の支援の様子を動画や静止画でタブレット端末に記録し、そのコメントを入れて家庭へ持ち帰らせる。

家庭では、タブレット端末に記録された学校

での様子に対し、コメントを書き込んでもらうようにする。また、家庭での様子も動画や静止画で記録してもらうことで情報の共有化を図るようにする。そこで児童の課題に対する有効な支援方法を、学校と家庭とが連携・協力して検討していくこととする。

(3) 評価の方法

学校から家庭へ持ち帰った動画と静止画の数を分類・整理する。また、対象児の保護者に聞き取り調査を行い、タブレット端末を活用した情報共有での利点や問題点を分析することとした。特に、学校と家庭とが一貫した支援を行うことで見られる児童の変容から効果を検討する。

3 実践の様子

(1) 事前準備

実践の流れを図1に示す。タブレット端末を選定する際には、保護者の使いやすさ、画像の鮮明さ、端末の軽さを考慮した。そこで、最適な端末としてiPad miniを選択した。本校は、タブレット端末を一人一台活用できる環境にあるため、持ち帰りも可能である。

保護者へは、年度当初の学級懇談会で実践の趣旨を図2に示す資料を用いて説明した。了承を得た上で、タブレット端末の使い方や画像の視聴の仕方、コメントの入れ方を一緒に練習してもらった。

(2) 記録の整理

動画や静止画で記録したものは、図3に示すようにアルバム機能を活用して整理し、保護者が見やすくなるようにした。内容は、各教科での学習指導、休み時間など他者と触れ合う様子、朝のスケジュール作り、音読発表会などの動画や、図工の作品、給食の量などの静止画である。動画や静止画には、日付とファイル名をつけ、アルバムの中に保存していくようにした。図4に示すようにメモアプリにも同じファイル名をつけ、そこに動画や静止画に対する学校からのコメントを入れ、その下に家庭からのコメント欄を設けるようにした。

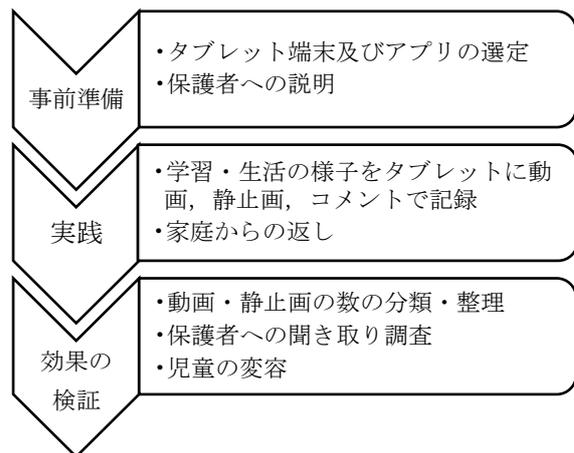


図1 実践の流れ

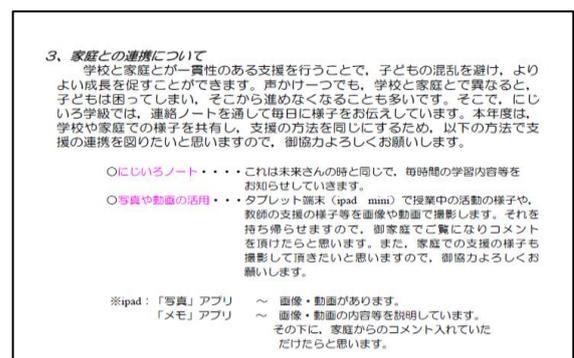


図2 保護者へ配布した趣旨説明の資料



図3 動画や静止画のアルバム

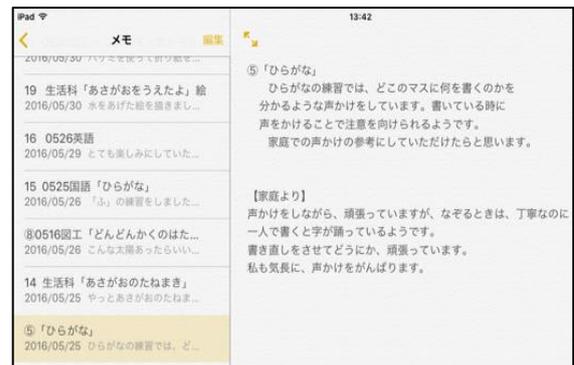


図4 画像のコメント・家庭からのコメント

(3) 国語での実践

図5は、国語の教科書の説明文を視写している場面の動画撮影の様子である。マスの中に入字を入れるために書き始めの位置に注目させるための支援や、とめ・はね・はらいに気をつけて書くための声かけの支援などを家庭で見てもらった。家庭学習でどのように声かけしてよいか分からなかった保護者から、「声かけしながら頑張っています。」というコメントが届いた。また、手書きの連絡帳にも「先生のような声かけをすると、うまく書けるようになってきました。」と書かれていた。このような動画を家庭に持ち帰ることで、保護者に支援の仕方を参考にしてもらうことができ、本児は混乱することなく家庭学習に取り組むことができた。

(4) 算数での実践

算数では、数字を読むことはできるが、その量や数字の順序性に理解の困難さが見られた。そこで、1～10までのカードを使ったゲームや、おはじきを使って数とその量が覚えられるように唱えながら学習する様子を動画で記録し、持ち帰らせた。それを見た保護者から、「日常生活の中で数に目が行くような声かけをしていきたい。」というコメントが届いた。

(5) 他教科等での実践

他教科においても、児童の発表の様子や作品を動画や静止画で記録し持ち帰らせた。図6に示すのは、図工の作品をアルバムにまとめたものである。作品にも、学習内容と製作中の様子をコメントして家庭に持ち帰らせた。保護者から、家庭でも同じように作品をつくる様子を見て、「はさみの使い方が上手になっていた。」というコメントが届いた。保護者は手先を使ったスキルの上達にも目を向けることができ、教師は家庭での様子を知ることができた。

(6) 家庭からの相談

家庭から、「学習中の集中力が続かず、どのような声かけをすればよいか分からない。」という質問が出された。そこで、授業中において課題に取り組む場面を動画で記録し、教師の支



図5 国語での動画撮影の様子



図6 図工作品のアルバム

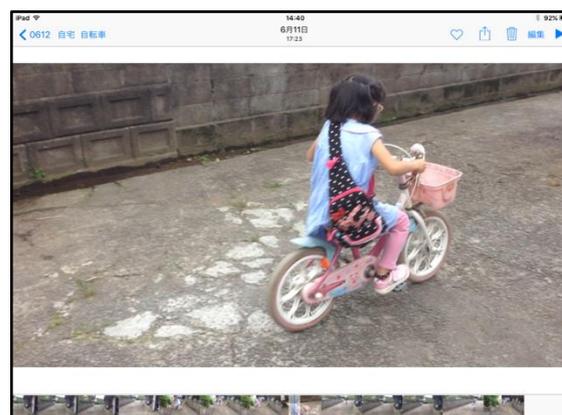


図7 家庭から送られた自転車練習の様子

援の様子を見てもらった。それを参考に、家庭でも同じ方法で支援してもらうようにした。

(7) 家庭から届いた情報

家庭から、図7に示すように自転車に乗る練習をしている動画が届いた。児童と休日の話をしている際に、自転車に乗る練習をしていることを知った。そこで、児童から教師に見せたいという提案があり、保護者がある様子を撮影した。学校で児童と一緒にそれを見ることで、家庭での様子を知ることができた。

他にも、児童が育てているあさがおの成長の

様子の静止画や、算数の家庭学習に取り組んでいる動画、音読の練習の動画が届き、保護者の支援の様子や、児童の家庭での頑張りを知ることができた。

4 成果

学校から家庭へ持ち帰った動画と静止画の数を表1に分類・整理した。実践を始めた5月から7月までの授業日数は56日で、欠席した日が2日あったため、出席日数は54日だった。その結果、持ち帰りの実施は96%だった。

学校から送った情報は、授業日数56日のうち、動画が89%、静止画が107%で、静止画の方を多く送った。家庭から届いた情報は、動画が16%、静止画が9%で、動画の方が多く届いた。理由としては、児童が、家庭学習に取り組んでいる様子を撮ってほしいという要望を出したため、保護者が動画を撮影したことや、保護者が家庭学習の支援の仕方に困ったことが挙げられる。学校が送った情報に対してのコメントは毎回届いた。保護者への聞き取り調査の結果を以下に示す。

- ・子どもは、学校のことを自分で伝えることができない。また授業参観では、実際の子どもの様子がわからない。動画を見ることで実際の子どもの様子を知ることができるのでよい。
- ・子どもも持ち帰った動画を一緒に見ることで、動画の説明をし、学校のことを話すことができるようになってきた。
- ・宿題を教えるとき、学校での支援の方法を参考にすることができるので、子どもも混乱せず取り組むことができた。
- ・家庭学習の様子を動画に撮ることが子どもの学習への意欲の向上につながっているため、スムーズに宿題を終わらせることができた。

5 まとめ

本研究の成果を以下に示す。

- 学校での学習や支援の様子を動画や静止画で家庭へ伝えることで、情報を共有し支援の一貫性を図ることができた。それにより、学習内容を確実に定着させることができた。

表1 情報のやり取り

	授業日数	コメント	動画	静止画
学校	56	54 (96%)	50 (89%)	60 (107%)
家庭	56	54 (96%)	9 (16%)	5 (9%)

- 手書きの連絡帳と同様に動画や静止画による情報を毎日送ったことで、タブレット端末を持ち帰ることが日常的なものとなった。家庭からも画像や動画が届くようになったことで、情報の共有をより一層図ることができた。また児童の学習意欲の向上にもつながった。
- 家庭学習でのつまずきの様子から、教師は次の支援へつなげることができ、学習指導が徹底できた。
- 保護者の「授業参観では見ることでできない子どもの実際の様子を知ることができるのでよい。また、家庭学習でどのような声かけや支援をすればよいか分かる。」という感想から、動画や静止画による情報共有が、支援の一貫性を図る上で有効なツールであるということを示した。
- 家庭から届いた動画や静止画の数から、何を撮影してほしいかを明確に伝えておく必要があることがわかった。

付記

本研究は、文部科学省委託事業「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」における高森町での実践成果の一部をまとめたものである。

参考文献

- 文部科学省(2010)教育の情報化に関する手引
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm (2016. 4. 30 アクセス)
- 文部科学省(2011)教育の情報化ビジョン
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm (2016. 4. 30 アクセス)